

アボリジニの酒の分配 中央オーストラリアの事例から

平野智佳子（神戸大学）

本発表は、アボリジニたちが飲酒規制をかわして手にした酒を、いかに複数名で飲み分けるのかを、アボリジニの独自の経済活動として知られるデマンド・シェアリング（Demand Sharing）【Peterson 1993】の観点から考察するものである。

デマンド・シェアリングとは、「要求による共有」のことである。ピーターソンによれば、ある人が誰かにモノを要求するのは、その人が困窮しているからというだけではなく、むしろ両者の社会関係を常に生産し、維持するためである。あるいは、こうした相互関係を要求したり、すでにある社会関係を実体化させたりする場合もある。こうした態度は、平等主義的な社会秩序の中心であり、所有や、所有から生まれる不平等から先住民を引き離しているという【Peterson 1999】。

近年ではオーストラリア国家によるアボリジニ社会への福祉政策がもたらす変化としてデマンド・シェアリングの再編が論じられている。大野【2010】は、人間関係を維持するために、貨幣や物品がデマンド・シェアリングに活用されていることを踏まえつつ、都市部や地方町の生活の場では、個人の所有の概念の広まっていることを指摘している。そして、こうした変化を、モラル・エコノミーの価値体系の崩壊の予兆として捉えている。これらの議論は、貨幣経済へのアボリジニの対応に焦点を当てたものだが、現代的問題を理由に国家介入を受けているアボリジニの今日的な状況については十分に検討されていない。

オーストラリアの中央砂漠に位置する調査地では、2007年から北部準州緊急措置、後に介入政策とも呼ばれるようになるアボリジニへの福祉改革が施行されている。その一項目として開始された飲酒規制により、アボリジニたちは酒屋で酒を購入することが制限されており、アボリジニの、特に酒を好んで飲む人びとにとっては、酒が希少価値の高いものになっている。さらに、酒の資金源となっていた生活給付金にも使途制限が課され、酒の入手は容易ではなくなっている。ところが、彼らは、酒宴の場において、手に入れた酒を出し惜しみはしても、遙色ない程度に飲み分ける。つまり、消極的にはあるが、デマンド・シェアリングが成立していると考えられるのである。

本発表では、飲酒規制をすりぬけて酒を手に入れようとするアボリジニたちの社会関係に着目して、なぜ彼らが酒を分配するのかという問題を考えていきたい。とりわけ注目するのは（1）飲酒規制がしかれて

いる中で、彼らがいかに酒を手に入れたのか、（2）そのプロセスでどのようなやりとりが交わされたかである。結論を先取りすれば、アボリジニたちが酒を手に入れて飲むという一連の行動は、単独で行われるのではなく、彼らの社会的ネットワークが基盤となって成立するということ、そして、飲酒規制をかわして手にした酒を分配するということが彼らの社会関係を再生産・維持する仕掛けとなっていることを示したい。

本発表の試みを別の言葉で言いかえると、介入政策が浸透し管理が強まるアボリジニ社会において、いかに人びとが酒の分配を通してモラル・エコノミーの価値体系を再構築しているのかを明らかにすることである。本発表では、この問題を、近代国家の中で再生産されるアボリジニの社会秩序の在り様に着目して考察していきたい。

【参照文献】

大野あきこ

- 2010 「文化的差異としてのデマンド・シェアリング—貨幣・商品・“生活保護”経済が再編する現代アボリジニの親族関係—」『オーストラリア研究』第23号、73-85。

Peterson, N.

- 1993 ‘Demand sharing: reciprocity and the pressure for generosity among foragers’, *American Anthropologist*, (NS) vol.95, no.4: 860-874.

- 1999 Hunter-Gatherers in First World Nation States: Bringing Anthropology Home. 『国立民族学博物館研究報告』23 (4) : 847-861. (「近代国家の中の狩猟採集民—オーストラリアの人類学」)
保苅実訳、小山修三・窪田幸子編『多文化国家の先住民—オーストラリア・アボリジニの現在』世界思想社、2002 : 261-283)

キーワード：酒、アボリジニ、分配、法規制、社会関係